

## 相愛大学研究シーズ集

シーズ名	大乘仏教から考える「他者性」と「不在の寛容」について: 物語りの重要性を中心に	
所属	人文学部	人文学科
氏名	井上 陽	
【概要】	<p>およそ紀元前後ころに成立した「大乘」という思想改革運動は、その原理の中枢に「他者」の存在を組み込みました。この「他者」とは一体何者なのか、そしてこの「他者」は私たちに人間にどのように作用するのかがこのシーズの肝となります。私たち人間は、私が思っているその私は、本当に私自身なのか。あるいは外在的にも、内在的にも、「他者」という存在を通して私自身が見えてくるのではないかと。大乘仏教が原理に組み込んだ「他者」を今日的な問題も視野に入れて考えていきます。一方で、大乘仏教の中でも阿弥陀仏の住する極楽浄土に往生するという物語りを説く浄土思想の登場は、阿弥陀仏が私たちと深く関わる「他者」であるばかりでなく、「不在の寛容」を知らしめるものであったと考えられます。私たち人間は、ほぼ無自覚に「不在の寛容」を通して高度な社会を構築してきました。これは人間社会にしかみることができないことで、動物社会にはみることができないものです。究極的な「不在の寛容」は死の受容であり、死では終わらない思想とも関わるものです。その点において浄土思想の登場はまさに死の受容ということとつながることになります。極端な言い方をすると死の受容は高度な人間社会の構築に不可欠なものであるとも言えるでしょう。仏教思想への眼差しは2500年という歴史への邂逅にとどまるのではなく、今日の私たちを問うことと大きく関係するものとなります。仏教思想から「人間」そのものを問いたいと考えています。混迷を窮める現代社会の中で今後私たちはどう生きていくのか。仏教思想にたずねてみたいと思います。</p>	
キーワード	大乘仏教／他者／不在の寛容／物語り／浄土／阿弥陀仏	